

資源ブーム後の経済成長を担う

——清水達也著『ラテンアメリカの農業・食料部門の発展——バリューチェーンの統合——』

研究双書No.627、アジア経済研究所、2017年3月——



清水達也

ラテンアメリカから輸入される農畜産物といえば、読者は何を思い浮かべるだろうか。スーパーマーケットのバナナ売り場で多いのはフィリピン産であるが、エクアドル産のほか、有機栽培などを売り物にしたコロンビアやペルーからの高級なバナナもみかけるようになってきた。このほかにも、チリ産のブドウやメキシコ産のアボカド、マンゴーも目にする機会が増えている。畜産物では、以前ではフードサービスで利用されていたブラジル産鶏肉が、スーパーでも売られるようになってきた。

筆者はスーパーの青果物売り場で、グリーン・アスパラガスの産地をよくチェックする。アスパラガスは主に春から初夏にかけて旬を迎える作物で、この時期はみずみずしい国産品が販売されている。春の初めは長崎県産や佐賀県産が主で、夏にかけて北海道産や長野県産が増える。しかし10月以降は国産から輸入物に入れ替わる。年内は南半球のオーストラリア産が主で、年が明けるとメキシコ産が多くなる。その狭間の12月中旬からの1か月弱の間は、ペルー産のグリーン・アスパラガスのみかけることがある。

本書はラテンアメリカが主に輸出市場に供給する農畜産物に焦点をあてる。輸出を担う農企業が、作るだけにとどまらず、加工、流通・販売、フードサービス等の食料部門と結びつくことで、産業として発展していることを示す。本稿では、筆者がどのようにラテンアメリカの農業・食料部門を研究してきたか、その経緯を説明しながら、この部門がラテンアメリカの経済開発を支える部門の一つとなり得ることを示したい。

●アスパラガスとの出会い

アジア経済研究所に入所して担当国となったペルーに派遣された2000年当時、ラテンアメリカ諸国では非伝統的農産物輸出の拡大が注目されていた。

ペルーは1990年代から新自由主義にもとづく経済改革を行い、ラテンアメリカのなかでも積極的な民営化や貿易自由化に取り組んだ。その結果、縫製業や製靴

業など、輸入品との競争にさらされた国内製造業の多くが衰退した。自動車の組立や家電製品の製造を手がけていた日系企業も国内での製造を取りやめた。そのなかで伸びていたのが非伝統的農産物輸出である。ペルーでは砂糖、綿花、コーヒーの3つが伝統的な輸出農産物である。しかし1960年代の農地改革などを経て、1980年代までには砂糖と綿花の輸出が大きく減少していた。それに対して1990年代に輸出が増え始めたのが生鮮野菜で、これに続いて2000年代には生鮮果物の輸出が増えた。

生鮮野菜のなかでも米国向け輸出が大きく増えていたグリーン・アスパラガスは、非伝統的農産物輸出の主人公であった。筆者はリマ滞在中に、何度かアスパラガス農場を訪れた。そこでは、筆者がみたことのない近代的な農業が営まれていた。詳しくは本書に譲るが、農場は数百ヘクタールの規模で、最新の技術を導入し、生産・加工・輸出を一貫して手がけていた。顧客である先進国のスーパーマーケットからの需要に応じて、播種の時期を決めたり灌水や施肥を調節したりして、出荷時期を調整していたのである。

ペルーから帰国してしばらくした2005年度に、アジア経済研究所で「ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論」研究会（星野妙子主査）が始まり、筆者も参加した。この研究会は、新興国の経済成長に伴う需要増加に対応して、ラテンアメリカ諸国の一次産品輸出が増えていることに注目した。そこで各国が輸出する産品の特徴や用いられる技術、そして生産・流通にかかわる主体や産業組織を分析すると、これまでの一次産品輸出とは異なる点がみられることが明らかになった。

具体的には、ラテンアメリカ諸国からの輸出が新たに増えている産品の多くが高付加価値産品で、新興国の経済成長に伴い今後も需要が増えると思込まれた。これらの産品は、プロダクトアウト（できるものを売る）ではなく、マーケットイン（売れる物を作る）にもとづいて開発が進み、輸出が増えた。

さらに生産、加工、流通、小売という、生産から消

費に至る一連の活動のつながりであるバリューチェーンの各段階が、契約などを通して結びつきを強めている。これにより、消費者の嗜好など小売段階（川下）の情報が生産段階（川上）に流れて商品開発に役立てられ、畑や加工場など川上の情報が川下に流れて生産履歴の維持（トレーサビリティ）を可能にしている。

●生産や流通の統合に注目

農畜産物バリューチェーンの統合に興味を持った筆者らは、2007年度に「ラテンアメリカの畜産インテグレーション」研究会を立ち上げた。ここでは鶏肉（ブロイラー）インテグレーションに焦点を当て、投入財供給、飼育、処理解体、二次加工、流通・販売といったブロイラーのバリューチェーンの各段階が、どのようなメカニズムによって統合されるのか、そして統合には地域的な特徴はあるのかについて、メキシコ、ペルー、チリの事例を検討した。この研究会で明らかになったのは、ブロイラーを飼育する技術の革新、安価なタンパク質としての需要増加、スーパーマーケットをはじめとする新しい流通市場の発達などに適応するために、バリューチェーンの統合（＝ブロイラー・インテグレーションの形成）が進んだことである。

筆者は2011年から2年間、再びペルーで在外研究の機会を得たが、今度は青果物の国内流通を研究対象とした。ペルー人の主食の一つであるジャガイモは、現在でもそのほとんどが伝統的な流通チャネルを經由して消費者に届けられる。具体的には、アンデス高地をはじめとする産地からリマの公設中央卸売市場を経て、市内の小売市場や個人店舗に並ぶ。このような伝統的な流通が、都市部におけるスーパーの増加でどのように変わっているのかを調べた。伝統的な小売市場でもスーパーの店頭でも、売っているジャガイモ自体に大きな違いはない。しかし実際に産地から売り場までの経路をみると、さまざまな違いがあることがわかった。小売市場や個人店舗で売られているのは、産地から消費地へ運ばれた「収穫物」である。いわゆるプロダクトアウト型の供給である。一方スーパーで売られているのは、サプライヤーと呼ばれる業者がスーパーの求めに応じて調達し、洗浄、分類、包装して契約どおりに納入する「商品」で、マーケットイン型の供給といえる。消費者が求める利便性の高い商品の品揃えを維持するために、スーパーやサプライヤーはさまざまな



生鮮アスパラガスのパッキング場（ペルー・イカ州、筆者撮影）

工夫や努力を重ねている。

●経済発展における農業

これまでの研究を通して、農畜産物が食料として消費される過程を、一次、二次、三次産業に分けて分析しては、農業・食料部門の潜在力が十分に理解できないと感じた。逆に、農畜産物が生産されてから食料として消費者に届くまでのバリューチェーンを分析の単位と捉えることで、農業・食料部門はラテンアメリカ諸国の経済発展を牽引しうる潜在力を備えていることを明らかにできると考えた。

今日の農業は、種一つをとっても品種改良や遺伝子組み換えなど、知的集約的産業として大きく成長している。栽培の過程も、情報通信産業の成果を応用した精密農業をはじめとするスマート農業の導入が進んでいる。そして収穫後も、加工、流通、販売、フードサービスなどにより、消費者の手に届くまでに加わる付加価値が増えつつある。

ラテンアメリカは一次産品輸出経済では発展できないとしたプレビッシュ・シンガー仮説は、交易条件が悪化する要因の一つとして、ラテンアメリカが輸出する農産品需要の所得弾力性が低いことを挙げた。しかし輸出青果物はもちろん、加工食品やフードサービスなど多様な形態での食料供給に対する需要は、所得の向上に従って増加する。つまり、所得弾力性が高いのである。そうであれば、農業生産と食料供給を統合した農業・食料部門は、先進国や新興国向け輸出だけではなく、中間層が増加しつつある国内市場向けにも供給を増やし、ラテンアメリカ諸国の経済発展を牽引する原動力の一つとなっていこう。

（しみず たつや／アジア経済研究所 地域研究センター）